

『和漢朗詠集』の伝本享受

— 和歌本文の変遷 —

一、はじめに

平安時代中期、藤原公任によって編纂された『和漢朗詠集』は数多く書写され、読み継がれてきた。平安時代の写本については、粘葉本・伊予切・近衛本の系統と関戸本・雲紙本の系統が対立する本文を有するものであることが知られている。これら以外の諸本については「いづれとも判定つかず夫々に特異の本文を有して雑類とも称すべきもの」（堀部正二）『校異和漢朗詠集』大学堂、一九八一年）とされ、系統立てて分類はされていない。

平安時代に書写された伝公任筆本・葦手下絵本・山城切を始め、鎌倉期以降に書写された諸本類を検討してみると、多く諸本が共通して粘葉本に一致する箇所、関戸本に一致する箇所が

少なからず見受けられる。つまり、粘葉本系統、関戸本系統が混在した本文が流布していた。

『和漢朗詠集』の伝本は現存状況が把握しきれないほど現存し、さらに複雑な異同が見られ、系統分類をすることは容易ではない。

本稿では、平安期写本と鎌倉期以後の写本を比較し、とくに和歌本文に注目し、鎌倉期以降の伝本の特徴を明らかにしたい。なお、本文の引用に際しては、適宜漢字をあてた。

二、『和漢朗詠集』の諸本

『和漢朗詠集』の伝本は、平安時代に書写されたものに限っても、古筆切として伝わるものも含めると二十種類以上になる。

惠 阪 友 紀 子

今回は平安時代の書写のうち、完本または上巻がまとまって伝わるものを取り上げ、これらと鎌倉期以降に書写された伝本のうち、主なものを比較する。今回取り上げたのは以下の諸本である。

なお、詩題や作者は省略されたり後から加えられたりするものが多いため、比較対象には入れず、詩歌本文のみを対象とした。

(1) 平安書写

名称(略称/略号)

粘葉本系統

関戸本系統

その他

(2) 鎌倉期以降書写

- ・ 専修大学蔵建長三年本(専修大学本/専)
- ・ 天理大学付属図書館蔵貞和本(貞和本/貞)
- ・ 関西大学図書館蔵生田文庫本(生田本/生)

- ・ 伝行成筆粘葉本(粘葉本/粘)
- ・ 伝行成筆伊予切(伊予切/伊)
- ・ 伝行成筆関戸本(関戸本/関)
- ・ 伝行成筆雲紙卷子本(雲紙本/雲)
- ・ 伝公任筆卷子本(伝公任筆本/公)
- ・ 世尊寺伊行筆葦手下絵本(葦手下絵本/葦)
- ・ 伝藤原定頼筆山城切(山城切/山)

- ・ 逸翁美術館蔵伝冷泉為秀筆本(伝為秀筆本/逸秀)
- ・ 国会図書館蔵菅原長親書入本(長親本/長)
- ・ 書陵部蔵本(203167)(書陵部D本/書D)
- ・ 正安二年奥書本(正安本/正)
- ・ 伝後京極良経筆嵯峨切(嵯峨切/嵯)
- ・ 冷泉家時雨亭文庫蔵本(冷泉家本/冷)
- ・ 陽明文庫蔵伝後醍醐天皇筆本(伝後醍醐天皇筆本/後)
- ・ 逸翁美術館蔵伝行成筆本(伝行成筆本/逸成)
- ・ 逸翁美術館蔵伝伊房筆本(伝伊房筆本/逸房)
- ・ 逸翁美術館蔵伝行能筆本(伝行能筆本/逸能)
- ・ 逸翁美術館蔵伝二条為親筆本(為親本/逸親)
- ・ 今治市河野美術館蔵伝寂蓮筆本(伝寂蓮筆本/蓮)
- ・ 東北大学三春秋田文庫蔵伝兼好筆本(伝兼好筆本/兼)
- ・ 今治市河野美術館蔵伝久我長通筆本(伝長通筆本/通)
- ・ 東北大学三春秋田文庫蔵覚想法親王筆本
- ・ (覚想法親王筆本/覚)
- ・ 蓬左文庫蔵伝山崎宗鑑筆本(伝宗鑑本/宗)
- ・ 東京大学図書館本(中古16・311)(東大本/東)
- ・ 書陵部蔵本(2031)(書陵部B本/書B)
- ・ 書陵部蔵本(谷21)(書陵部C本/書C)

三、鎌倉期以降の写本の本文系統

『和漢朗詠集』の伝本系統としては、粘葉本系統と関戸本系統の対立が知られる。両系統の大きな対立は、上巻の巻頭に置かれた目録の配列と、上巻春部の項目配列とが挙げられる。

①上巻目録・冬部

粘葉本 ……霜・氷付春氷・雪・霰…

関戸本 ……霜・雪・氷付春氷・霰…

②上巻春部の項目配列

粘葉本 ……藤・躑躅・款冬…

関戸本 ……躑躅・款冬・藤…

鎌倉期以降の写本は、①②のどちらの箇所も、調査した範囲ではすべて関戸本に一致する。大枠では関戸本の系統に一致する。

しかし、詩歌の有無や本文異同を見ていくと、関戸本の系統に属するとも言いがたい。たとえば、上巻秋部「雁付帰雁」の配列と詩歌の出入りを挙げておく。

③上巻秋部「雁付帰雁」の配列

三二一 雁飛碧落書青紙、隼擊霜林破錦機。

三二二 碧玉裝箏斜立柱、青苔色紙數行書。

(粘・伊ナシ)

三二三 雲衣范叔羈中贈、風櫓瀟湘浪上舟。

(関・雲ナシ)

「碧玉」の詩句は粘葉本系統になく、「雲衣」の詩句は関戸本系統にない。しかし、平安書写の公任筆本をはじめ、その他の諸本では、すべてこの両方の詩句をもち、かつ配列に乱れもない。つまり、両系統が混ざり合った形の伝本が流布していたと考えられる。

本文異同の点でも両系統の混在が認められる。たとえば、関戸本系統に一致する例には次のようなものがある。

「款冬」一四二

かづ鳴くかみなび川にかけ見えて今や散ららむ山吹
の花(粘)

「咲く」粘・伊・逸成以外の諸本

「九月尽」二七七

山さびし秋も過ぎぬとつくるかも横の葉ごとにおける朝霜（粘・伊・葦・東）

「暮れぬと」関・雲、その他諸本

「つきぬと」山・逸能

「暮れなば」書C

一方、関戸本系統に対立し、粘葉本に一致する例も多くある。

「雨」八五

桜がり雨はふりきぬ同じくはぬるとも花のかけにかく

れむ（粘）

「もる」関・雲

「九月尽」二七五

頭目縦随禪客乞、以秋施与太応難。（粘）

「客」↓「僧」（関）

「応」↓「以」（関） 雲紙本は両字とも判読不能

八五、二七五番のように、粘葉本と関戸本が対立する場合で、調査し得た諸本ではすべて粘葉本に一致する。また、次のように、諸本間で対立する例も多い。

「早春」一五

いはそそぐたるひの上の早蕨のもえいづる春になりけるかな（粘・伊）

「たるひ」葦・山・冷・逸親・逸能・逸房・貞・長・

嵯など

「たるみ」関・雲・公・蓮・逸秀・書B D・逸成・正

など

「蘭」二九〇

主しらぬ香こそほへれ秋の野に誰がぬぎかけしふじば

かまども（粘・伊）

「香こそほへれ」為秀・覚・逸親・書C・貞・正・

専・嵯など

「香はほひつつ」関・雲・公・葦・山・蓮・冷・書

B・兼など

このように、諸本間で対立が見られる上に、それぞれの諸本が必ずどちらかの系統に一致するわけでもない。たとえば葦手下絵本は一五番歌では粘葉本系統に一致するが、二九〇番歌では関戸本系統の本文を持つというように、特定の伝本がどちらかの系統の特徴をはっきり示すということはない。

なぜこのように複雑な本文異同が起きているのだろうか。

四、本文改変（1）

粘葉本・関戸本が一致しているが他本が対立する例を取り上げ、本文対立について考えていく。まずは、上巻夏部「更衣」一四四番、秋部「秋興」二二二番の場合を挙げておく。なお、諸本略号のうち太字は平安書写のものである。

背壁残灯経宿焰、開箱衣带隔年香。

〔残灯〕粘・伊・関・雲・逸能・書D・通・逸房・逸能

など

〔灯残〕公・葦・山・蓮・逸秀・冷・逸親・逸成・貞・

正・専・長・嵯など

楚思眇茫雲水冷、商声清脆管絃秋。

〔眇茫〕粘・伊・関・雲・山・東・逸親・逸能・書B D

など

〔森茫〕公・葦・逸秀・覚・宗・書C・逸成・逸房・

貞・専・嵯・正・長など

〔眇森〕通

逸翁行能筆本や書陵部D本など、一部の伝本は粘葉本などに一致するものもあるが、伝公任筆本、葦手下絵本、山城切などの平安書写本も含め、多くの伝本では粘葉本・関戸本とは対立している。これらの詩句は、どちらも白居易詩からの抜粋である。該当箇所の本文は次の通りである。

○背壁灯残経宿焰、開箱衣带隔年香。

（白氏文集・三三六〇・早夏曉興贈夢得

○背壁灯残経宿焰、開箱衣带隔年香。

（千載佳句・夏・一二〇）

○楚思森茫雲水冷、商声清脆管絃秋。

（白氏文集・八八二・盧侍御与崔評事為予於黃鶴樓置宴

罷同望

○楚思森茫雲水冷、商声清脆管絃秋。

（千載佳句・秋興・一六四）

いずれの場合も、伝公任筆本など後の本文が『白氏文集』や『千載佳句』の形に一致する。『和漢朗詠集』の本文改変、享受については、木藤智子氏が「平安時代における『和漢朗詠集』の書写と享受」のなかで、一四四番の「残灯」「灯残」の異同、

白詩などの用例を検証し、「平安書写本では、原詩の「灯残」という形ではなく、当時よく知られていた「残灯」というまとまった熟語の形で書写されていた」としたうえで、平安書写と鎌倉書写本の違いについて、次のように指摘する。

平安期の四本（引用者注・粘葉本・伊予切・関戸本・雲紙本の四本）に共通する「残灯」という本文は、それ以後の伝本には継承されず、鎌倉期の伝本では「灯残」の形に改められていたのであった。（…中略…）鎌倉期の朗詠集は原詩の形に校訂したのであろう。

確かに、和歌においても典拠によつて本文が書き換えられた例がみられる。

〔九日〕二二六五

わがやどの菊の白露けふごとにくよたまりて淵となる
らむ

〔たまりて〕粘・伊・関・雲・葦・山・蓮・逸能・

書D・兼・通など

〔つもりて〕公・為秀・東・為親・書B・逸房・貞・

正・長・嵯など
「せまりて」冷

二六五番歌は、粘葉本・関戸本いずれも第四句は「いくよたまりて」とあるのに対し、伝公任筆本など後世の写本の多くが「つもりて」とする。この歌は『拾遺集』秋部一八四番歌であり、天福本をはじめ『拾遺集』諸本では「つもりて」とある（『拾遺抄』に当該歌は所収されていない）。同様に、

〔權〕二二九四

朝顔をなにはかなしと思ひけむ人も花はいかが見ら
む

「いかが見らむ」粘・伊・関・雲

「さこそ見らむ」葦・蓮・逸秀・覚・宗・東・逸親・

逸能・書BCD・兼・通・逸房・

逸成・貞・専・正・嵯・長など

「いかが思はむ」冷

二九四番歌の場合も、第五句「いかが見らむ」が葦手下絵本に「さこそ見らむ」とあり、冷泉家本を除いて諸本とも「さ

こそ見るらめ」となっている。この歌も『拾遺集』（哀傷・二二八三）『拾遺抄』（雑下、宮内庁本、貞和本）にあり、やはり諸本とも「さこそ見るらめ」とある。

これらの例のように、平安期写本も含め、多くの伝本では典拠に合わせる形に本文改変されているように見える。もう一例挙げておく。

「早秋」二二一

秋立ちていくかもあらねどこの寝ぬるあさけの風はたもと寒しも²と寒しも

「寒しも」粘・伊・関・雲・公・葦・逸親・逸能など

「涼しも」山・蓮・逸秀・覚・書BC・兼・通・逸房・

長など

二二一番歌の第五句は粘葉本をはじめ、関戸本、伝公任筆本などでは「たもと寒しも」とあるところが、平安期書写では山城切は「たもと涼しも」と対立する。鎌倉期以降に書写されたものでは、伝寂蓮筆本、貞和本などをはじめ、複数の諸本が山城切に一致する。

この歌は、『万葉集』巻八・一五五五に「秋立ちていくかもあ

らねばこの寝ぬるあさけの風はたもとさむしも」とあるのが出典である。第五句は、粘葉本などの形が万葉集と一致する。

しかし、この歌は、『拾遺集』『拾遺抄』にも収載される歌であるが、『拾遺集』（天福本）や『拾遺抄』（流布本・貞和本）では「たもと涼しも」とあり、『拾遺集』の異本系統や『拾遺抄』（書陵部503・243本）などでは「寒しも」となるように、諸本間での対立が見られる。

このように、典拠によって書き換えられたというよりは、勅撰集の流布本の形、言い換えれば、平安期およびそれ以降に用いられた本文によって書き換える傾向があると考えられる。

五、本文改変（2）

しかし、本文改変が校訂の結果とは言いがたい例も少なくはない。上巻春部「三日付桃」の四四番歌を例に挙げる。

みちとせになるといふ桃の今年より花咲く春にあひそめにけり

「あひそめにけり」粘・伊・関・雲・葦・蓮・冷・

逸房・逸成など

「あひにけるなか」公・山・逸秀・東・逸親・書B・

通・貞・正・嵯・専など

「あひそしにける」多賀切・生

「なりにけるかな」書D

「あふぞうれしき」逸能・覚・兼・長など

この歌は、第五句にさまざまな異同が見られる箇所である。

『拾遺集』（賀・二八八）『拾遺抄』（賀・一九一）では以下の通りの本文になっている。

○みちとせになるてふ桃の今年より花さく春にあひにける
かな
(拾遺集天福本)

○みち世へてなるてふ桃の今年より花さく春にあひそしにける
(拾遺集異本系統・拾遺抄流布本・拾遺抄貞和本)

○みちとせになるてふ桃の今年より花さく春にあひそしにける
(拾遺抄書陵部405111本異本A系統)

○みち世へてなるてふ桃の今年より花さく春にあひそめにける
(拾遺抄書陵部503233本)

粘葉本や関戸本など、平安期の写本に多く見られる「あひそめにけり」の本文は、『拾遺抄』（書陵部503233本）のみに見ら

れる形である。伝公任筆本・山城切などの他、鎌倉期以降の多くの諸本は『拾遺集』（天福本）に一致し、これまでに挙げた例同様、典拠に合わせる形への改変に見える。その一方で、『拾遺集』（異本系統）や『拾遺抄』などでは「あひそしにける」の本文を持つものも少なくなく、平安書写の断簡である多賀切や鎌倉書写の生田本がこれに一致する。

それぞれの書写者が手元にあった『拾遺集』または『拾遺抄』の本文と校合しながら写したと考えられないことはない。伝公任筆本や葦手下絵本の場合、この四四番歌に限らず、他の箇所でも典拠に合わせた本文異同を持つ例が多く見られる。しかし、これら二本は装飾料紙を用いた卷子本である。とくに伝公任筆本は目録もなく、詩題や作者を一切記さない。さらに「梅付紅梅」など「付紅梅」のような付項目も省略するなど、見た目を重視する書写態度がうかがえる。このような態度の書写者が典拠を調べて本文を書き換えたとは考えがたいのである。

さらに、校合したと考えた場合、不審に思うのが初句である。四四番歌は、『拾遺集』（異本系統）『拾遺抄』（流布本など）では初句を「みち世へて」とするものも多いが、『和漢朗詠集』諸本ではすべて「みちとせに」とあり、異同はないのである。校合したとすればあまりにも片手落ちだと言わざるを得ない。

この四四番歌の例に限らず、本文異同の多くが下の句に集中する傾向が見られ、初句の異同は少ない。たとえば、「晩夏」一七〇番歌の場合、次のようになる。

ねぎごととも聞かで荒ぶる神たちも今日はなごしと人はいふなり

「ねぎごととも」↓「としごと」に「蓮

「聞かで」粘・伊・逸秀・冷・宗・東・逸親・貞・専な

ど

↓「聞かず」関・雲・公・葦・山・淨・覚・逸能・

長・書D Bなど

「神たちも」粘・伊・公・山・逸秀・逸能・書D・など

↓「神だにも」関・雲・葦・淨・冷・覚・宗・東・

逸親・書Bなど

↓「神たちと」蓮

「なごしと」粘・伊・雲・公・山・蓮・冷・東・書Bな

ど

↓「なごしの」葦・淨・逸秀・逸能・書D・貞・専

など

「人はいふなり」粘・伊・雲・公・山・蓮・冷・覚・

東・逸親・書D Bなど

↓「はらへなりけり」葦・淨など

↓「はらへといふなり」逸秀・宗・貞・専など

↓「はらへするらし」逸能など

一七〇番歌の場合、初句の異同は、伝寂蓮筆本の一本のみが「ねぎごととも」を「年ごと」とする。しかし、第二句以下は、非常に複雑な異同を呈している。

もう一例、「秋興」一二九を挙げておく。

秋はなほ夕まぐれこそただならね萩の上風はぎの下露

「夕まぐれこそ」粘・淨・逸秀・覚・宗・東・逸親・

逸能・書Bなど

↓「われにてしこそ」伊

↓「ただならずこそ」関・雲・公・葦・山・冷・

書Dなど

「ただならね」粘・伊・淨・逸秀・覚・宗・東・逸親・

逸能・書Bなど

↓「思ほゆれ」関・雲・公・葦・山・冷・書Dなど

※一首ナシ…蓮

二二九番歌の場合も第二～三句には異同が見られるが、初句に異同はない。

もちろん、初句に異同が見られる歌もある。

「早春」一六

谷風にとくるこほりのひまごとうちいづる浪や春の初花

「谷風」粘・伊・後・東・書B・兼など

↓「山風」関・雲・葦・生・淨・蓮・逸秀・冷・

覚・宗・逸親・書D・通など

↓「春風」山

↓「■風」公（■…判読不能）

↓「山川に」逸能

一六番歌の場合、初句にのみ異同がある。「谷風」「山風」の異同は単なる誤写ではなく、『古今集』（春上・一二）でも異同が見られる本文である。このような例がないわけではないが、大半の異同は初句以降に集中している。

以上のような状況を考え合わせると、『和漢朗詠集』の本文は勅撰集などの形に変わっていく傾向にあるものの、必ずしも校訂した結果とは言えない。むしろ、親本に忠実に書写したので

はなく、初句だけを見て、あとはそれぞれの書写者が暗唱している形で書いた結果であると考えるほうが自然ではないだろうか。

六、鎌倉期以降の写本の特徴

最後に、平安期書写本と鎌倉期以降の諸写本が対立する例を挙げておく。

「月」二五九

白雲に羽うちかはし飛ぶ雁のかげさへ見ゆる秋の夜の月

「かげ」粘・伊・関・雲・公・葦・山・蓮など

「かず」冷・覚・宗・逸親・書BCD・兼・通・貞・

専・正・長など

二五九番歌は、平安期書写本はすべて「かげ」であるが、鎌倉期以降の写本では「かず」の本文が多くなる。この歌は『古今集』（秋上・一九二）所収歌であり、嘉禄二年本をはじめ定家本の系統などでは第三句「かず」、元永本・筋切本、六条家の諸本では「かげ」と本文が対立し、定家と六条家の顕昭が論争した

ことでもよく知られた歌である。

平安写本のほか、伝寂蓮筆本・逸翁為秀筆本・逸翁行成筆本など、比較的書写の古いものでは「かげ」とあるが、伝兼好筆本・貞和本など、南北朝以降の写本になると圧倒的に「かず」とする本文が多くなるというはつきりした傾向を示している。

しかし、古今集歌がすべて定家本系統に一致していく傾向を見せるわけではない。

「暮春」四九

いたづらに過ぐす月日はおほかれど花みてくらす春ぞ少なき

「過ぐす」粘・伊・関・雲・公・葦・山・覚・書BC

D・兼・通・

「過ぐる」蓮・為秀・冷・宗・東・逸親・逸能・逸成・

貞・専・正・長

「おほけれ」逸親・逸能・覚・宗・東・逸房・嵯・長

○いたづらに過ぐす月日はおほえで花みてくらす春

ぞ少なき

(古今集・賀・三五二)

○いたづらに過ぐる月日はおほかれど花みて暮らす春

ぞ少なき

(興風集³・一四)

四九番歌の場合も、平安期書写本には異同は見られないが、後世の伝本では第二句～三句にわずかな違いがみられる。この歌は『古今集』（嘉暦二年本）では「過ぐす月日はおほえで」とあるが、これに一致するものは今のところ『和漢朗詠集』諸本には見られない。

平安書写本「過ぐす月日はおほかれど」は、『古今集』では元永本・筋切本などと一致する。伝為親筆本・伝行能筆本の「過ぐる月日はおほかれど」は、善海所伝本（私稿本）と静嘉堂文庫蔵の伝為相筆本の書入れ、伝寂蓮本、伝為秀筆本などの「過ぐる月日はおほかれど」は右衛門切と『興風集』に見られる本文であるが、それぞれが確認して校訂したとは考え難い。

やはり書写者が諳んじていた歌を書いた結果、このような複雑な異同になったのではないだろうか。

二五九番歌の場合、定家と顕昭の論争があったために本文が固定し、四九番歌の場合には意味の違いのような大きな異同ではなかったために混乱したのではないだろうか。

『和漢朗詠集』の写本は書写当時の歌の状況を反映していると考えられるのである。

七、まとめ

鎌倉期以降の諸伝本の特徴としては、漢詩文に関しては典拠による本文改変が多く見られるが、歌の場合は親本を忠実に写すのではなく、書写者がそれぞれに諳んじていた形で書き写した結果、異同が複雑になったと考えられる。またその本文異同は、書写当時の歌本文の状況を反映していると考えられる。

ところで、複雑な異同を見せる詩歌がある一方、詩歌に全く異同がない、または誤写程度の異同しか見られない詩歌も実は多い。上巻の場合、三分の一近くの詩歌にはほぼ異同がみられない。

今後はこれを手がかりに、異同の多い詩歌と少ない詩歌との比較などから諸本整理を試みたい。

〔注〕

- (1) 木藤智子氏「平安時代における『和漢朗詠集』の書写と享受」〔『百舌鳥国文』六号、一九八六年十月〕
- (2) この歌には他にも異同があるが、煩雑さを避けるために省略した。以下同様に必要箇所のみ異同を挙げる。
- (3) 冷泉家本「すぐる月日はおほかれど」、西本願寺本「すぐ

る月日はおほかれど」とある。

本論文は、国文学研究資料館の共同研究（特定・若手）『和漢朗詠集』の伝本と本文享受の研究の成果の一環である。

（えさか ゆきこ）／京都精華大学・特任講師